

章炳麟のインド論について

近 藤 治

はじめに

本誌前号に発表した小論「二〇世紀初頭のインドと中国——章炳麟を中心にして」において、私は、清朝末期の大学者章炳麟が一九〇六年に三度目の日本亡命を果たし、中国の革命派、中国同盟会の機関紙『民報』の主筆に迎えられて同誌にインド論および仏教論に関する十篇の論説を発表していたことを指摘し、そのうちの二篇「印度の鉢邏罕・保什二君を送るの序」「印度中興の望」を読み下して紹介した。『民報』第一三号（一九〇七）に発表された章炳麟の最初のインド関係の論説「印度西婆耆王記念会記事」は、前稿で指摘しておいたように島田虔次先生がすでに全文紹介されている。

そこで本稿では、これらに続いて『民報』第二〇号（一九〇八）に発表された「印度独立の方法」「印度人の日本観」「印度人の国粹論」「支那・印度連合の法」の四篇、並びに同誌第二四号（一九〇八）に発表された「印度の先民、地球日を繞り人身精虫を有するの二事を知る」の一篇を合わせた都合五篇の論説を読み下して紹介することにした。章炳麟の仏教論としては、彼が『民報』第一九号（一九〇八）に発表した「大乘仏教縁起考」と「大乘起信論弁」などの論説があるが、これらについては本稿では取り上げないことにする。読み下しの表記法については前稿と全く同じである。すなわち、これらの論説が収載された『章太炎全集』第四卷（上海人民出版社、一九八

五年)を底本とし、初出の『民報』版によつて異同を確認することとした。そして原注はブラケット「」中に、簡単な注記ないし言い換えはパーレン()中に記し、必要な場合は後注を付すことにした。難読の漢字には適宜ルビをふつて意が通じやすくなるように努め、またときにはキツコー()の中に原文にない補足語を加えたところがある。

一 印度独立の方法

印度人の独立を思うや、その端緒は近起(ちみそ)の四、五年の間なるも、然して塙固(確固)不撓の気は、世に能く之に過ぐる者なし。その術は則ち罷工(ストライク)、拒貨(ボイコット)自り始む。罷工は、人々相約して英吉利(イギリス)の用を為さず。庖人(コック)、走使(はしりづかい)と雖も皆な去りて顧みざれば、則ち工商仕官の徒、一切坐して困す。拒貨は、各村落皆な相約して英貨(イギリス製品)を用いず。先発する者有れば、英政府輒(すなわ)ち判するに罰金の科を以つてす。既に罰すれば、則ち他の村落此の金額を以つて之を補う。故に罰に就(つ)けども損をする所無し。英政府治むべからざるを知り、亦たこの条を刊去(削去)し、其の自ら便するに任(まか)す。英政府、印度人を待するに、名は寛大為り。然れども小児の「梵種(インド人)万歳」を誦する者は、輒(すなわ)ち引きて警察署に至たらしむ。学校教師及び報館記者、歳ごとに懲創(こころしめ)有り。印度人、其の繼ぐ無きを懼(おそ)るなり。凡そ國事を以て下獄する者は、国人皆な金を傾けて以て贈る。禁錮数月にして、利を獲(と)て其の苦を償(たが)うに足る。是を以て人々自ら奮い、英政府に抗せんことを願う。

摩拏(マヌ)以来、本(も)と四姓階級(ヴァルナ制度)有りしも、今は則ち平等たり。学者、愚民と亦た深く相い結び、能く其の用を得たり。其の国民協會(インド国民會議)に急進、平和の二党(じふ)有り。之を要するに、皆な独立を以て主と為せり。美利堅人(アメリカ人)其の高義(崇高な目的)を聞き、火銃二千挺を以て之に資す。余聞くならく、印度の学者言(い)わく

「十年ならずして印度必ず返りて自主国為らん」と。顧みて中国を視れば、則ち倜傥乎として（はるかに）之を去ること遠し。

二 印度人の日本観

日本の無趾^{あしなし}人大隈重信^{おおくまじゆんしん}、嘗て^{かつ}亜洲^{アジア}の事を演説す。支那、印度人皆な往きて聴く。無趾曰く「亜洲の文明の国、今日本を以て第一と為す。次は即ち支那。巴比倫、印度の輩^{たぐひ}の若きは、往日の文化観るべきと雖も、今は即ち比較するに足らず」と。支那人皆な喜び、印度人皆な怒る。暇日^{かじつ}（休みの日）、印度人の帶氏余を過れ、因りて此事を道^{みち}う。帶氏則ち哂^{わら}つて曰く、「日露戦争自り以来、日本人傲睨^{げうぎ}（尊大不遜）甚しく、以て東方の龍伯（伝説上の巨大人）は即ち己が族と為せり」と。

無趾^{あしなし}（大隈重信）固より亦支那を蔑視す。特だ留学の数、幾ど万人に及び、而も早稻田（早稻田大学）尤も功名^{こうめい}の寶^{たから}を以て、無趾^{あしなし}支那の学生と相結び、以て其の勢を中土（中国の領土）に張らんと欲す。故に意を屈し之に倂^{おな}ふことを憚^{はば}らず。且つ閩島^{かんとう}の争末^{かくらつ}だ罷^{おろ}らずして、二辰丸事^{ふたつたねまること}又起り、二国輯睦^{しゅうぼく}（和睦）の情亦少衰^{せうさ}う。片言の側媚^{そくび}（僅かなことばによる邪惡なへつらい）を藉^かりて、以て感情を動盪^{どうどう}する（たかぶらせる、アピールする）に足るとし、好（友好）に復帰せんことを庶幾^{しよき}う。其の支那人を愚弄すること、亦た甚しきかな。

印度の日本に於けるや、事の相渉^{あいわ}ること鮮^{すく}し。日英同盟は則ち惟だ印度に光復（復興）有る事を恐る。醜言もて詆斥する（辛辣なことばで謗る）も、亦た人情なり。是の若^{ごと}きは独り一無趾^{あしなし}のみにあらず。蓋し其の国の俗なれば則ち然るなり。然りと雖も、日本の文化は安^{やす}の所より之を受けしや。儒書の文芸は近く支那より取る。仏教は乃^{すなわ}ち印度自り進入^{いんどう}す（回り回つて来入する）。二国無ければ、日本は則ち終に古の蛟螭^{こうち}蜃蛤^{しんかく}（みずずちはまぐりの生息

する未開の地）為るのみ。朝鮮の文化は、印度、支那の儕にあらず。然れども日本の文字を知り得たるは、尚王仁の『論語』『千字文』を其の国（朝鮮）より伝えるに頼るなり。今視るに、印度已に亡び、支那又己が戦勝と爲る。朝鮮は乃ち戦わずして附庸陪属（小国の属領）の伍（仲間）と就る。驕矜（たかぶり誇る）として自ら貴とし、始めは則ち呂鉅（傲岸）、終りは則ち車上舞（有頂天）たり。凡そ旧より日本人に于て徳を有する者、力めて之を按抑（おさえる）せざることなし。然して日本の文明は、一発（一個）の自己を有する者なりや。學術は道うに足らず。復た起居費用（生活必需品）を論ずるも、日本人に言有り、「文化高ければ必ず多く糖を食し、坐は必ず几に抛る（机椅子を用いる）」と。今案するに、蔗糖の作法（製法）は本印度自り之を中国に伝え、後日本に及ぶ。卓椅の用（机椅子の使用）に至つては、中国の此を行うこと既に千余歳、田舎と雖も之を施す。日本の家居は、則ち惟だ是れ席地する（地面にむしろを敷く）のみ。偃臥に牀無く、幾ど貴賤の所同じなり。人力の輓車（引き車）は、美国の教士（宣教師）其の法を実授す。日本の旧制は独り椎輪（単純な車）有るのみ。是れ、其の工芸、械用（道具）に于て固より一得無し。今は欧州を則效す（手本にする）と雖も、大都型像（表面上の形式）を模写して成る。是を以て人に驕るは、何れの顔か之れ厚きに過ぎん。

夫れ文化の高下は、固より国の盛衰、興廢を以て期（目安）と為さず。波蘭既に亡びるも、哥白尼の地動の説、今に至つて人に尊信せらるるは、亦たその例なり。今、欧州人誠に多く日本に面諛す（面前でへつらう）。然して稍識知（知識）有る者は、猶お支那の貴ぶべきを知る。蓋し印刷、羅鍼（羅針盤）、火銃（火薬）の法、悉く漢土自り之を欧州に伝う。日本は則ち有ること無し。印度は亡びたるも、珊斯克利多（サンスクリット）の文、徳人多く諷誦（そら読み）して之を葆愛（愛護）し、或いは直にその文を用いて以て書を著す。日本の仮名は、一として世人に崇貴せられる者有りや。夫れ勢力（権勢や利害）の心を懷いて以て文化を覩れば、固より住くとして抵牾（牴牾）（齟齬）せざる無し。仮令に印度にして独立を得、一たび戦いて遂に英人に勝ちたりとせんか、文化の高下は、未だ必ずしも遽

かに昔に勝らず。竊かに意うに、無耻之を聞かば、其の論議当に今と異なるべし。人の性固より多く侈慢（驕慢）なる者有り、亦多く猥賤（下劣）なる者有り。侈慢と猥賤の二者（両方とも）兼ね宿す。良医を得て其の神経を診しむれば、何れの形状を作すや知らざるなり。

余、印度人を觀るに、皆莊嚴（落ち着いて威嚴があり）、醇篤（人情が厚い）にして、数数たる（汲々とした）擲揄（輕薄）の人にあらず。今、日本の峭刻（苛刻、殘酷）を論ずることは是の如し。豈自伐（自矜、自慢）の過ちの甚だしきこと、以て招尤（とがを招く、非難さるべき）するに足り、（帶氏のような）長者（有徳者）と雖も温厚の語を作すこと能わざらんか。

帶氏又曰く、「日本未だ興らざる時に当りては、亜洲諸國、時時小釁（ささいな間隙、不和）有りと雖も、猶お平和に近かりし。今や是に反す。夫れ土耳其は亞洲において忤戾（背反）を為すこと仁恩無し。然して以て大勢を撓乱する（かき乱す）に足らず。白人を引きて以て同類を侮る者は、則ち誰ぞや」と。愛爾蘭獨立党に某君有り。美洲に寄居し、『該克里克米報』を創り、嘗て書を寓せて余に与えて曰く、「極東の有國（國、日本をさす）朔方（北の勢力、ロシア）と戦い、斬殺の過当を意にせず、遂に自ずから驕恣（傲慢）たり。其の浜海、營州（遼寧省から朝鮮半島に至る一帯）の人を遇すること、慘酷無狀たり。其の驕を平せんと欲すれば、惟だ兵刃のみ」と。然るかな、然るかな。余、去歲より西婆耆王の大祭を觀、無耻の語るを聞き、已に書を作りて之を彈せり。私に怪しむらくは、印度の諸君子、何に因りてか彼の愚弄を受け、曾て覺察（自覺）無きやと。今、帶氏の言う所を聞き、乃ち梵土（インド）の人士、無知ならざる人の鑑なるを知れり。

三 印度人の国粹論

釈迦は「西域伝」に塞種（シヤカ族）と称す。印度に入りて巨族（有力な民族）と為り、その望至繁（大いに盛ん）たり。仏の喬答摩（ゴータマ）釈迦と称するは、釈迦は其の氏（氏族、クラン）、喬答摩は其の望（姓）なり。陽曆一月の朔（はじめ）、余、印度人の所に在り、是において初めて有釈迦氏（マハヤ）に見り。釈迦氏論ずらく、民族の独立は先ず国粹を研求（追求）することを以て主と為し、国粹は歴史を以て主と為す。自余の學術は皆普通の技にして、惟だ国粹のみは則ち特別為り。誓えば、人に里籍（所籍する村と戸籍）有りて、其の祖父の姓名に与るが如し。他は人知らずとも、「その人が誰であるか」といふことは「無害（このうえなく）明哲為り（はつきりしている）。己（おれ）誰であるか」知らざれば、則ち至て童昏莫（どうこんもく）の属と（人は）非るなり。国の立つ所以は、民族の自覺心に在り。是の心を有するは、動物と異なる所以なり、と。

余、固より命（使命）を国粹に致す者なり。釈迦氏の言を聞き、梵（インド）・漢（中国）の情異らざるを知り、窃かに沾沾（せんせん）として（自得して）自ら欣幸し、常に以て人に語る。難者（反論する者）有りて曰く、「国粹は一切以て法と為すべきに非らず。残賊、奸（悪事）を作すの事、具に史書、国典に在り。之を誌すは無益にして、徒らに人道を蹂躪（あしむ）するのみ。欧州の諸の達者（見識者）、政府の民に禍するを憤り、或いは国粹を遮撥（しやはつ）（排斥）するを以て事と為す。今其の説、亦漸く東方に及ぶ。何すれぞ子、之に自圉（じやうい）（抱泥、独善）するや」と。

之に応えて曰う。「義に是非有り。是を取り非を舍るは、主觀の分なり。事に細大有り。大を挙げて細を遺さざる（後世に残さない）は、客觀の分なり。国粹は誠に未だ必ずしも皆是ならず。抑そも其の記載は故言（昔の言葉）にして、情状は具に在り。是非を舍きて事蹟を徴する（明らかにする）は、此人道において損益何なりや。故に老聃（老子）は礼を以て忠信の薄（忠・信を弱めるもの）と為し、而して周室の典章は猶お精を殫し以て之を

治むるがごとし。葛洪（抱朴子の著者）は経籍を以て相斫（戦争）の簿領（帳簿）と爲し、而して漢・晉の掌故（礼楽の故実を司る官）は乃ち力を畢して以て之を蒐む。誠に主観と客観は部伍（組織、集団）に異有り、故に並び行われて相滅せざるを知るなり。故貉（北方の異民族）の子、生まれて声を同じくし、辟施（徘徊）の動作、初めは異有らず。其の事を行うこと同じからざるを以て、国粹も亦や因りて以て別爲り。分際（區別）を泯絶する（なくしてしまふ）は、勢い固より能わず。且つ人類の鳥獸と殊にする所以は、惟だその能く往事を識りて、過去の念を有するのみ。国粹 尽く亡び、百年以前の事を知らざれば、人と犬馬、当に何ぞ異なるべけんや。人に自覚無ければ、即ち他人に陵轢（侮蔑）され、以て自生すること無し。民族に自覚無ければ、即ち他民族に陵轢され、以て自存すること無し。然れば則ち国粹を抨彈（指彈）するは、正に人をして異種（異民族）の役（奴隸）爲らしめるのみ。吾嘗て以爲えらく、欧語（ヨーロッパの諸言語）に洞通（通曉）せんには、禹域（中国）の殊言（少数民族の言語）を求むるに如かず、大地を經行（探検）せんには、九州（中国）の風土を省みるに如かず、外史を搜求（研究）せんには、遷・固（司馬遷と班固）の遺文を考うるに如かず、と。之を學術に求むるは、渉る所既に広く、必ず擲落して就く所無し（雲をつかむようなものだ）。孰若れぞ区中（ある分野）に迫在（集中して専攻）して、能く其の纖悉（詳細）を得ることを爲さん。之を民德（民衆の德義）に求むるは、邦人諸友、等しく是れ周親（親しい身内）、相見えて道故し（往時を語り）、懷旧の蓄念（積もり積もった思い）を発し、以て民族を輯和（和合）し羯胡（異民族）を攘斥するに於いて、其の庸うるところ多し。此れ蓋し就事（事に従事すること）、之を言うなり。行義（品行、事蹟）の是非に至りては、異職（様々な役目）有るを慮る。然りと雖も、純德琦行の士は、国無ければ之無し。而して苦行艱貞（困苦して節を持すこと）、隱淪（隱遁）独善は、固より中国の長ずる所なり。若し夫れ之に政治を施し、之に社会（組織）を行なうに、重農輕商（農業を重んじ商業を輕んず）の説、懷遠禦寇（遠方の民族をなづけ敵を防ぐ）の方（方策）、多主（各地の支配者たち）の均平（宥和）に過直（当を

失すること）せしめざれば、吾国の白人に勝る所以は、固より已に多し。印度人は大地（地球上、世界中）において最も愷悌（温厚）了諒（慈愛、篤実）為り。今に至るも食は炙卵（卵子焼き）を過ぎず、肉羹（肉いため）は則ち絶つ。其の俗、蓋し事に師法と為すべし。独り往昔に四姓階級の分有り、近世に嫠婦（寡婦）焚に就くの俗（サティーの制度）有るは、当に撥除（除去）すべきのみ。その他、呪印巫術、神怪万端は、學術既に明らかにし、亦た息滅（消滅）に易し。誰ぞ謂わん、釈迦氏の説は自圍為りと。夫れ欧洲と日本、事を其の国粹に求むるも、民族既に完うしたれば、亦た以て少弛むべし。義を其の国粹に求むるは、人（他人）を侵略するにあらざれば、則ち人を以て輿台（召使）豢豕（家畜）と為すなり。故に発憤する者は事に撥去（反撥）せんと欲す。蓋し弊を矯め謬を匡すの辞、爾らざるを得ざる者（やむをえざるところ）有り。此れ支那、印度に於いては論ずる所にあらざるなり。盜賊自ら其の跖（盜跖）、躡（莊躡、二人とも古代の大盜賊）の書を毀つは、義においては甚だ善なるも、良家をして亦た爾らしめんと欲するは、太だ誣（欺瞞）ならずや」と。

他日復た帶氏に諒ぐ。帶氏曰く、「今日、亞洲の為に計る。独立は其の先なり。生分（仲違い）を均平する（仲直りさせる）は其の稍次なり。彼是を玄同し（二体化し）、政法（体制）を泯絶（打破）するは其の最後なり。大同を百年以後に求めて、旦暮の計（差し迫った計画）を為さざるは、斯れ則ち務めを知らずと為すのみ」と。

四 支那・印度連合の法

亞洲の国、漢土は東に在り、梵土は西に在る。幅輪（面積）至て広く、中を隔つに吐蕃（チベット）、雪山（ヒマラヤ山）の險あり、直達するを得ず。漢世（漢代）は多く蔥嶺（パミール高原）由り往来し、兩晉（西晉と東晉）以後は、及ち始めて海に泛かびて交（交趾の略、安南）、広（広東・広西の略、兩広）に抵る者有り。唐の時

大いに通ず。王玄策⁽¹⁸⁾たび罽^{きん}（間隙、不和）を開くも、甚^{はなだ}しくは厲^{はげ}しからず。明の時漸^{しだい}に梗塞^{ふさ}がり、行人無し。
〔明時以来〕今に至ること五百余歳なり。

聞くならく、岱^{たい}廟（泰山廟）に温涼の玉有り。清の乾隆の世に印度自^より入貢せしものなり。山東の友人、嘗て之を見れり。その長さは二尺余可^{ばか}り、厚さ四寸、広さ八寸許^{ばか}りにして、青・白・藍の三色を作^なし、之を按^なづれば一端は温、一端は涼なり。其の絶珍自效（絶妙至極）なるを觀^みれば、親睦の情猶^なお在るがごとし。近二歳中、廓爾喀^{グルカ}亦た再^{また}び貢使（使節）を遣^{つか}す。然して清廷の之を遇すること甚だ倨^きれり。貢使、四川道^{四川道}り入るに、總督の行賞は番札（えびすの作法）たり。臚^ろ列の百官、總督の部堂（大堂）に登る。坐^ざ几（椅子）の高さ四尺許^{ばか}り。貢者は下（床）に在りて、其の従者の伏するを以て几と爲す。乃ち牛脛（牛の片足）、羊脛（羊の片足）各一つを出し、生にて之を啖^くらわしむ。貢使食^くらうこと能わず。須臾^{しゆゑ}にして（ほどなく）、引き入れて武候七たび孟獲を禽^{いけどり}にするの故事を優演する（見事に演じる）を觀せ、以て之を震耀^{しんやう}せしむ（轟音と閃光で耳目を塞がす）。貢使亦た解せず。清廷、隣国において、強ければ則ち倂^{ねい}談し（こびへつらい）、弱ければ則ち躡^{きよう}倨す（おごりたかぶる）。此れ最も嗤^し鄙^ひ（あざわらいやしむ）すべきものなり。近世、朝鮮・安南・緬甸^{ビルマ}・琉球の諸国、既に他人に属す。独り廓爾喀のみ英藩（英領の境域）の左右^{かたはち}に逼^{ひつ}在（近在）し、猶お漢土の親むべきを知るがごとし。聘^{へい}問（遣使）の時至り、遽^{たじ}かに囚虜を以て之を待するは、何ぞ其れ務めを知らざるや。

民間の印度人に於けるや、宜^{よろ}しく往^{むかし}日の旧好を念^{おも}い互^{たがひ}相に扶持すべきは、独り人道の宜^{しか}しく然^{しか}らしむところにあらず。今日に居^{あた}りて漢土を維持せんと欲すれば、亦た印度、西方の屏蔽^{へいへい}（藩屏）と爲り、以て西人南下の道を遏^{とど}むるに藉^よらざるを得ず。支那と印度既に独立し、相^{あひ}互^{たがひ}に神聖同盟を爲さば、而る後亞洲殆ど事（紛争、懸案）少なからん。連合の道は、宜しく両国の文化を以て、相互に灌輸^{かんしゆ}（流通、伝授）すべし。昔、内典（仏教經典）中国に由り訳成る。唐の時、復た『老子』を訳して梵文と爲し、以て印度に達せり。然るに歴史の事蹟は、地域広輪なれば、

邈焉（遙然）として通曉すること能わず。今は即ち当に此（歴史事蹟に通曉すること）を以て先路と為すべし。

語言の文字に至つては、互いに障碍有り。亦た宜しく講習（学習）を略有（取得）すべし。梵土の珊斯科利多の文は、德意志人を以て之を学ぶに、十五年にして而る後明瞭（明瞭）たり。高才（秀才）捷足（俊敏）の士にして、尚十年を以て功課（評價）す。此れ艱阻と雖も、然して凡そ歐洲の文字を習わんとすれば、最後は羅甸、希臘に至つて止んぬ。其の歲月亦た相等し。近世印度の通行（汎用）文字は、稍や古昔と異なるも、賢豆文（ヒンドウスターニー語）を以て雅言（正規の言語）と為すれば、即ち之を習うは猶お古語より易きがごとし。今歲、安慶（安徽省安慶府）より四沙門を遣わし、西游（渡印）して求學せしむ。是れ、固より梵・漢を溝合（修好）するの端たり。然りと雖も、印度の文に通ずる者は、沙門に止まるのみか。白衣（俗人）講ぜざれば、則ち亞洲の自主（自治、獨立）において、猶お豪毛（僅少）の益無きがごとし。余、醢雞（かつおむし、小虫）蚊蚋（か、ぶよ）の微（低い身分）を以て、妄りに學者の引重（重い責め）を為す。懷うに此數年、独り唱え和するもの寡なし。悲しみ中（こころ）従り来り、天闕（抑制）すべからず。故に此を書して以て同好に勧む。世の有志の士にして、務めて実を求め名に殉わぬ（名譽を求めぬ）者、庶幾わくは此の志を成さん。

五 印度の先民、地球日を繞り人身精虫を有するの二事を知る

印度の學者、嘗て余と語る。今を距ること千四百年は、即ち白人の所謂五世紀なり。印度に天文師巴斬伽邏焦闍有りて、地球の日（太陽）を繞る事を発見せり。哥白尼に先んずること且に千余歲ならんとす、と。余謂う、先民独り見り、亦た奚すれぞ是に止まるや。小乗の『起世經』に言う、「一洲、日正中（太陽の南中）の時、一洲、日始めて没す。一洲、日始めて出で、一洲、正に半夜に當る」と。是れ亦た先に地（地球）の円きを曉れり。直に印

度のみにあらず、震旦（中国）人の測天の学、素より印度と視て速ばざるも、渾天家言えらく「天は雞卵の如く、地は卵黄の如し」と。是れ亦た地体（地球のかたち）渾円なるを曉るなり。緯書（漢代流行の予言書）に言う、地に四游有り。是れ亦た地球の軛動（自転）を曉るなり。蓋し此義、本比較（比較）量度（推量）に由りて之を得え、艱深難了（意味の深い理解）せしものにあらず。

且つ動物の精子を有するが如きは、歐洲の十七世紀自り罕曼なる者有り、始めて之を発見せり。其より先は、或は「卵中に雞有り」と云い、或は「卵中に雞無し」といひ、相争いて決せず。而して印度は、則ち二千歳前已に精子を知れること、小乗の『治禪病祕要經』に云うが如し。

子蔵（子をもうけるための臓器）は生蔵の下、熟蔵の上に在り。九十九重の膜は死猪の胞（胎児を蔽う膜）の如し。四百四の脈は子蔵に従ひ、猶お樹根の如く、諸根を散布して、屎囊（くそぶくろ）を盛るが如し。一千九百の節は芭蕉の葉に似たり。八万戸（個）の虫、圍繞して四百四の脈を周回（周囲の取りまき）し、以て子蔵に及ぶこと、猶お馬腸の如く、直ちに産門に至る。臂釧（腕輪）の如き形にして、団円大小あり。上は円く下は尖く、狀貝齒の如し。九十九重は一一の重間に四百四虫有り。一一の虫に十二頭と十二口有り。人水を飲む時、水精、脈に入りて布散し、諸虫、毘羅虫の頂に入る。直ちに産門の半月に至り、半月、不浄水を出す。諸虫各おの吐き、猶お膿を敗るが如し。九十虫の口の中に入る。十二虫の六竅（穴）中従り出ること、純汁（深紅の汁）を敗るが如し。

復た諸虫有り。秋豪（秋に生え変わる獸の細毛）より細く、其の中（純汁の中）に游戲す。諸の男子等、宿惡の罪あり。故に四百四脈、眼根従り四支に布散し、諸腸に流れ注いで、生蔵の下、熟蔵の上に至る。肺・脾・腎の脈、其の（子蔵の）両辺に於て、各おの六十四虫有り。各おの十二頭、亦た十二口あり。宛縋して（まきついて）相著し、狀、指環の如し。青色の膿を盛んにし、野猪の精の如く、臭惡巨いに甚だし。〔子〕

蔵の陰処に至り、分れて三支と爲る。二支は上に在り、芭蕉の葉の如く、一千二百の脈有り。一一の脈中に、風虫を生ず。細きこと秋豪の若く、毘蘭多鳥の背に似たり。諸虫、口中に筋色虫を生ず。此の虫の形体は筋に似、子蔵に連持（接続）し、能く諸脈を動き、精を吸いて出入す。男虫は青色、女虫は紅赤なり。七万八千あり、共に相纏裏（まといつき）す。状、累環（環をずらしながら次々と重ねた形）の如く、瞿師羅鳥の眼に似たり。九十八の脈は上のかた心を衝いて、及ち頂髻（頭頂のもどり）に至る。諸の男子等、眼、色に触るれば、心根を風動し、四百四の脈、風の使う所と爲り、動転して停まらず。八万戸の虫、一時に口を張り、眼より諸膿を出して、諸脈に流注し、及ち虫頂に至る。諸虫崩動し、狂いて知る所無く、前の女根に触る。男精の青白なるは、是れ諸虫の涙にして、女精の黄赤なるは、是れ諸虫の膿なり。

又、小乗の『正法念处经』に云うが如し。

十種の虫、髓中を行き、精中を行くこと有り。何等を十と爲すや。一は毛虫と名づけ、二は黒口虫と名づけ、三は無力虫と名づけ、四は大痛虫と名づけ、五は煩悶虫と名づけ、六は火虫と名づけ、七は滑虫と名づけ、八は下流虫と名づけ、九は起身根虫と名づけ、十は憶念歡喜虫と名づく。

所謂筋色虫の、男に在りては青白、女に在りては紅赤なる者は、即ち精子と胚珠是れ已。復た精中を行くと云い、名づけて起身根虫と爲すは、身根此に由りて起ち、其の精子爲ること益ます明らかなり。大率印度の解剖の術、素より優れり。故に筋色虫、起身根虫有るの説は、当に今の所謂精子たるべし。又、八万戸の虫有るの説は、当に今の所謂細胞たるべし。夫れ罕曼、初めて精子を見し時、未だ嘗て顕微鏡を用いず。徒生物を解剖するを以て、景略（おおよそその形）を窺見し（うかがい知り）、遂に卓然として祭酒（学長）大師と称す。而して印度は二千歳前自り、已に其の名物儀象（名称や種類の特徴）を知るは、斯亦た一奇なり。然して印度の諸聖哲、本第一の義諦（宗教的真理）を以て重しと見、推歩の密（進化の理論）、解剖の精（精確さ）は未だ以て寵（得意）と爲すに

足らず。沉んや儀器（実験器具）は伝わらず、能く人人をして証見（確認）せしむること勿し。是れ、固より欧人に速ばず。独り空・色の双び亡い、前後に際断するに至つて、歐洲の諸哲学者、能く其の名言を挙ぐると雖ども、其の境界を証すること能わず。而して印度に瑜伽、止観の法有り。人人をして皆触証して之を実験するを得令む。斯れ固より欧人の能く企つ所にあらざるなり。

以上が「はじめに」で予告した五篇の論説である。しかしここで、章炳麟が一九〇七年の『民報』第一三号に発表した「印度西婆耆王記念会記事」も紹介しておくことにしよう。この文章は彼の筆による一連のインド論の劈頭に位置するものであり、前稿ですでに述べたように、島田虔次先生が早く一九五八年の『思想』第四〇七、四〇八号において全訳紹介され、後に『中国革命の先駆者たち』に収録されているので、人々のよく知るところとなっている。従つてここで私が紹介する必要はないのであるが、なにせ島田先生のなされた紹介は半世紀近く前のことで、収録著書も入手困難となつているため、敢えてこの「記事」も収めておくことにする。ここでの紹介は、島田先生の訳に全面的に依拠している。ただし、先生が訳文を明晰、流暢にするために省略された漢字なども、章炳麟の原文のニュアンスを伝えるため、すべて生かしていくことに努めた。

六 印度西婆耆王記念会記事

陽曆（一九〇七年）四月二十日、印度の游学者、西婆耆王記念会を虎門女学館に開く。其の領袖は法学士鉢邏罕氏（ムガル朝）と較べ甚しき為り。学者、政治・法律を講ずることを得ず、他国に之くと雖も、猶お禁遏（差し止

め)を被る。独り美洲に在りて自由を得、此を以て法学士の号を獲たり、と。其の友人の保什氏、能く日本語を爲し重訳して応対す。二子(両氏)、印度の衰微の状を道うに、語次鯁咽し(咽につかえ)、神氣(気分)激越す。余、印度国民協会(インド国民会議)の近状を問う。答えて云わく、惟だ此れ、人意を慰むに足るのみ、と。又、歐洲の希臘・羅馬中興等の事を挙げ、相比況(比較)を用い、支那・日本を以て(インドの)兄弟國と爲す。道いて學問に及べば、則ち仏法・吠檀多教と歐洲近世哲學、皆能く其の優劣を評す。中国の孔(子)・老(子)・莊子・晦庵(朱子)・陽明の属、諦曉(通曉)せざる無し。復た近世に陽明無きを以て、中国の爲に悲しむ。其の搢腕咋齒(切齒)、辭氣(語氣)慷慨を觀るに、誠に印度の有心の士なるかな。

西婆耆王は十七世紀の末に当り、民間自り起りて、蒙古帝國(ムガル帝國)を覆えし、印度人をして獨立を得しむ。蓋し吾が國の明祖(朱元璋)と相類せり。印度人、敢えて英國に反対し獨立を経画(計畫)するを以て衆に昌言(宣伝)せずして、一に其の意を記念會に寓す。西婆耆王の蒙古に反対せしを觀れば、則ち今當に英國に反対すべきを知るべし。凡そ列會中の賓席者、宜しく心に其の意を知らざること無かるべし。其の意に因りて之に賛成するは、人道の當に然らしむ所なり。縦い(賛成すること)能わざるも、猶お之を阻抑(妨害)すること為さざるなり。鉢邏罕氏、既に余及び同志三數人を招く。而して日本人の參列する者百を以て數え、大隈伯(大隈重信)親ら臨して演説す。高車(高蓋車)門に戻り、鼓吹(軍樂)謹しく作す。參席者、印度の亡(衰亡)を哀しまずして、大隈伯の爲に掌を撃つ。伯、英人士女の坐に列する者を見るや、鞠躬して(身をかがめて)握手し、曲に恭謹を尽せり。余意わざりき、著名の政黨にして此の如きを。演説に及びては、惟だ英皇(イギリス國王)の印度を撫すこと至仁、博愛にして、比擬(比肩)すべからざるを言い、印度人を勸ますに社會を改良せよ、他人を怨むこと勿かれ、暴動を謀ること勿かれを以てす。語畢るや、英人某復た前みて演説す。大意に謂わく、英人と印度とは親しきこと骨肉の如し、と。其の語率ね円滑にして曲媚なるは、蓋し心に印度人の長厚(溫厚)なるを知り、是

を以て之を籠絡（手なづけ）せんとするなり。英人は道うに足らず。余独り怪しむらくは、大隈伯、東方の英傑を以て、而も亦た是の諧媚（迎合）取容（阿諛）の語を為すは、豈に昏耄（こんもう）（耄碌）して短氣（落胆）せしや、と。抑そも「日英」同盟の故を以て、印度人をして手を藉る所を得しめるを欲せざりしや。此れ、当軸秉政（たうしやくへいせい）（国政担当者）と在野の政党首領とに在りては、宜しく是の説を為すべし。伯、既に引退し、国政に於て關係する所無くして、猶お是の言を作す。是れ、真に余の解せざる所の者なり。

始め鉢邏罕氏、余に見えて言く、「二千年前、印度僧有り、日本僧と同じく支那に至る。支那僧、之を留めて宿らしめ、因りて言いて曰く、吾が三国は其れ猶お摺扇（しやうせん）（扇子）のごときか。印度は其の紙、支那は其の竹格（扇子の骨）、日本は其の繫柄の環繩（扇子の要）なるか、と。夫れ環繩小なりと雖も、魁柄（扇子の骨）を幹旋（開閉）するは是に在り。今、紙と竹格は皆破壊され、独り環繩のみ日び益ます善を増す。是れ、宜しく以て之と掣提（提携）すること有るべし」と。嗚呼、斯の言、其の属望すること何如と為さんや。支那と日本、皆印度の仏教を奉じて以て其の道德を増進す。此れ、猶お近世歐洲諸国の希臘に於けるがごとし。希臘既に亡ぶ。而して英の詩人擺倫、之が独立を助けたり。今、吾が二国の印度に於ける、豈に当に是れと異なるべけんや。支那は固より自ら謀る能わず。而して日本は猶お幾微に望むべき有り。縱令機權（權謀）方略（計略）遠くに及ぶ能わずとも、此の心固より已むべからず。

印度人は至つて和平愷易（平和温厚）の民なり。仁にして人を信じ、甘言を以て撫慰し易し。仇讎（かたき）と雖も、一たび握手すれば則ち其の怨み解く。幸いに一、二の学者有りて、発憤し自ら励ますも、猶お独唱にして和するもの寡きに苦しむ。其の言は隱約（控え目）にして敢て肆にせず、汚辱窮屈の地に処りて、而も自ら其の痛心を言わず。今茲に会を開き、鐘鼓を陳ね国歌を唱すと雖も、猶お田横の徒、敢て哭せずして蒿里（送哀歌、挽歌）を歌いしがごときなり。終に他人の口を藉りて、之が為に其の氣を激昂せしめんとせり。今、伯乃ち之に教え

て午後為らしめんとす。何ぞ其れ恕たる（平氣でいる）や。若し英人の坐する在るを以て、頓言して以て情を泄らすを欲せざれば、但だ語るに自靖自獻（国の安寧のために献身）して時を相て動け、を以てすれば、則ち足らん。而るに英皇の仁愛を挙ぐるは、何為る者ぞ。夫れ、英人の印度を待すること、誠に少法人の越南を待するに愈る。然れども此れ（英人の仁愛）を以て越南人に語れば、則ち其の言得うも、此を以て印度人に語れば、則ち之を失すること遠し。蒙古、游牧腥羶（生臭い獣肉を食う人々）の国なるを以てして、其の印度を待すること、猶お今の英人に視べ寛為り。然る後知るべし、文明の愈いよ進める者、其の人道を蹂踐（踏みにじり）すること亦た愈いよ甚しきを。既に我が子を取り、又我が室を毀ち、而も慈善小補（僅かの償い）を以て仁と為し、囚虜を寛待するを以て徳と為す。文明之國、偽りの道德を以て人の耳目を塗ぐこと、大略是くの如し。彼の法人の越南人を待するや牛馬の如く、英人の印度人を待するや乞句（乞食）の如し。乞句、少牛馬に愈ると雖も、權利の尽く失われたるを奈何せん。今の印度は一大給孤園（祇樹給孤獨園、また祇園、ここで孤兒や貧者に食を給した）のみ。仁人志士此を觀れば、宜しく涕を流し心を摧かざる者無かるべし。彼の擺倫の「季臘軍歌」を為りしは、正に當に之を印度に移し用うべきなり。嗟乎、擺倫世爵（世襲貴族）なりと雖も、特だ年少く未だ大事を更ざるの詩人のみ。若し、佐命の元勳（大隈重信）を以て之に比すれば、其の資望（名望）閱歴（経歴）固より當に速ばざるべし。何ぞ今世卒に一の東方の擺倫を得ざるや。

鉢邏罕氏、嘗て支那に遊ばんと欲せしと言う。余、告ぐるに、清廷の官吏は脂の如く韋の如く（脂韋は佞人のたとえ）、惟だ利を是れ視る。公（貴公）多学と雖も、彼（清廷）、之を直亡國の虜とのみ視ん、を以てす。然りと雖も、今の（余の）見る所を以てすれば、則ち政党（の要人）の懷抱（胸の内）、大抵知るべきなり。

又按ずるに大隈伯、加奈陀、濠州の自治を得たるを以て、印度も亦た此を得べし謂えり。此れ、真に倫と於さざるを擬えり。濠州の自治は英人主為りて、土民は与ること無し。加奈陀の自治は英人と他の白人主為りて、

土民与ること無し。使^たい英政府、印度を開放して自治を得しむるも、恩は白人に及ぶに過ぎざるのみ。印度人、縦^{たて}え下、紅番（アメリカ原住民）に比するには至らざるも、亦た相待^{あひ}すること略優^{やゝまさ}るのみ。美国^{アメリカ}の黒人を觀るに、参政の名有りと雖も、其の実、猶^なお齊民^{せいみん}（平民）と次比（比肩）せず、凌遲^{リンチ}・炮烙^{（火あぶりの刑）}免れざる所なり。況^{いは}んや印度は英人の利藪（利益の淵藪）為り。此の海王の国（英國）を挙げて、印度人と之を共にせんや。非律賓^{フィリピン}の議員を選ぶを得たる所以^{ゆゑん}の若きは、終^{つい}に力を以て之に抵抗し、故に然れり。印度人、英人の為に死を効して以て杜蘭斯哇^{トランスヴァール}を滅ぼす。其の勤むること至れり。杜蘭斯哇は自治を得たるも、印度は猶^なお自治を許されざれば、則ち又非律賓の比にあらざるなり。寛仁大度^{いじん}の云は、只英人の為に弁護し、印度人をして其の轂^{こう}中^{ちゆう}（籠絡）に入らしめんとするのみ。小兒の啼^なくを止めんとして、誘^{いさそ}うに飴餅^{いへい}（あめともち）を以てするが如し。其の人を欺くも亦た甚し。

おわりに

章炳麟には印度に関する論説の多いことを島田虔次先生が教えて下さったおかげで、私はこの清末の大学者との出会いをもつことができた。私は修士論文でインド国民會議の成立史論に取り組んだこともあって、中国の近代史にもそれなりに関心をもっていた。当時、京都大学の人文科学研究所におられた島田先生は、一九六四年度から文学部でも週一回講義を担当されることになり、最初の年度は王陽明年譜の講義であつたが、次の一九六五年度は清末「国学」の成立、一九六六年度は民報研究というように近代史の講義を講じられた。先生の学問的迫力に圧倒される思いを抱きながら、私は講筵の末席で聴講していたが、パキスタン留学の希望がかなえられたので一九六六年度の途中で聴講を断念し、パンジャーブ大学の方に移った。

一九六五年の初秋のころ、島田先生は講義の後で章炳麟にインドに関する論説のあることをさりげなく教えて下さった。そこで人文科学研究所の歴史研究室の小野和子さんのところに教えを乞いに行くと、章炳麟の筆になる『民報』所載の多くの論説を教えて下さった。『民報』に翻訳紹介されたインドや欧米の新聞・雑誌の記事が相当数あることも教えて下さった。私はこれらすべてを写真版に収め、製本して保管していた。後になって知ったことであるが、当時人文科学研究所では小野川秀美先生主宰の民報研究会のもとで民報の索引作りが進められていた。それが大冊二巻の『民報索引』上・下（京都大学人文科学研究所、一九七〇、七二年）となつて公刊されたことは前稿で紹介したとおりである。

保管していた写真版をじっくり読む時間を確保することは、私にとってなかなか難しかった。日月のみが徒に過ぎ去つていった。一九九七年に入つて、島田先生がかねて所望されていたガンディー思想に関する書の一つとして M.K. Gandhi, *Hind Swaraj and Other Writings*, ed. by Anthony J. Parel, Cambridge: Cambridge University Press, 1997 が入手できたので、これを四月下旬に先生のところにお送りしたところ、折り返し先生から五月一日付けのお便りを頂戴した。そのなかで先生は「まさしく小生のひそかに求めていたところにピッタリの本」とあるといつてこの書を非常に気に入つて下さるとともに、先生の著『中国革命の先駆者たち』と右の『民報索引』の二書を挙げて私が所持しているかどうか尋ねられ、「索引の方は中国専門家以外は持つている人は少いと思いますが、インド関係の項目も相当あるので学兄には御役に立つかも知れないと思います。……学兄によつて中印関係史への御寄与が実現すれば望外の幸です」と述べて、『民報索引』の恵与を提案して下さった。かくして巨冊二巻本の索引は、先生のお宅から一旦人文科学研究所に運ばれ、同研究所の狭間直樹教授の厚意によつて、同年一〇月一日私はこの書を佛教大学において安全に落掌した。

島田先生はもとよりのこと、多くの方々のこうした厚意によつて実現した『民法索引』の入手は、私の章炳麟関

係の文献蒐集に拍車をかけた。といっても、中国史の専門家ではない私の文献蒐集法は非能率的でかつ一面的であったであろう。しかし、島田先生の学恩に少しでも報いることができるよう章炳麟のインド論についてまとめてみたい、という私の気持ちは強まった。手始めに、一九九八年度の佛教大学大学院の文化交渉史特殊研究の授業で半期を章炳麟のインド論に充てたが、まだ論文にして発表するほどの自信はもてなかった。そうこう遷延している間、島田先生は二〇〇〇年三月二日忽然と不帰の客になつて逝かれてしまった。自責の念に囚われた私は焦つたが、どうすることもできなかった。奈良大学の菅野正教授から二〇〇三年五月の同大学史学会大会で講演するよう依頼を受けたとき、私は意を決して章炳麟を取り上げることにした。それが前稿であり、本稿はその続編である。

もし前稿と本稿とを島田先生にお見せすることができたならば、先生自身が「太炎の文章の特徴たる難文の名文」(『中国革命の先駆者たち』一八四ページ)といわれる章炳麟に無謀にも飛び込み、とんでもない読み間違いをおかしているかもしれないことに苦笑されるに違いない。しかしそれも叶えられぬ今となつては、ただ先生のご霊前にこれらの拙稿を捧げるしか術はない。ご高配賜つた小野和子教授、狭間直樹教授、菅野正教授にも、この場をかりて感謝の意を捧げる。

なお、前稿の注(24)で、鉢邏罕はインドのボールバル出身のイスラーム教徒バルカトゥッラー(Barkatullah)に当たるかもしれないと指摘しておいたが、その後入手した文献によつても、それでまず間違いのないことが判明した。⁽³⁶⁾また、島田先生が入手を喜ばれたガンディーの初期の作品『ヒンド・スワラージ』は、英語版のもととなつたグジャラーティー語版からの邦訳が先生ご逝去の翌年に刊行された。⁽³⁷⁾これら二点をここに付記しておく。

註

- (1) Mann ヒンドゥー教にいう人類の始祖。
- (2) 一九〇七年二月のストラトにおける年次大会において、インド国民会議が急進派と穏健派の二派に分裂したことをさしている。
- (3) 大隈重信は黒田清隆内閣の外相時代の一八八九年、排外主義者のテロに遭い右脚を失った。
- (4) 帯はベンガル地方に多いデー(ローマ字表記はDe Day, Day など、人によって異なる表記法をとる場合が多い)なる人名をさすものと思われ、これがどの人物であったのか特定するのは難しい。湯志鈞『章太炎伝』(台湾商務印書館、一九九六年)一九一ページでは、亜細和親会に参加したインド人の一人として「帯君」を挙げている。
- (5) いわゆる間島問題。間島は中国吉林省の松花江上流地域。この地に朝鮮人が入植し、清国との間に起こった境界線問題が間島問題。韓国を保護国化した日本が一九〇九年に清朝と協約を結び、この地域の領土権が清国に帰すことに同意し、この問題は落着いた。
- (6) 第二辰丸事件。単に辰丸事件ともいう。一九〇八年二月、神戸の辰馬商会所属の第二辰丸がマカオ近辺で清国巡視船にとらえられた事件。中国の革命派に武器を密輸しようとしていたというのが拿捕の理由であったが、日本側の強引な交渉姿勢に清朝政府が折れたため、中国で最初の日貨ボイコット運動が発生した。佛教大学の同僚、原田敬一氏の教示による。
- (7) 日露戦争において、中国はその国土が戦場となったものの中立政策をとり、戦後のポーツマス条約によって日露両国軍の満州からの撤退を約束させたこと、などをさしている。なお、己の字は民報版では已(すでに)の字となっている。
- (8) 一九〇五年創立のシン・フェン党をさす。
- (9) 『民報索引』下、巻末九、三〇ページによって、この雑誌が『ゲールリック・アメリカン』(Gaelic American)であったことを知る。
- (10) 『民報』では「西城伝」と誤記されていた。
- (11) 国粹は広義にはある国固有の精神上、物質上の特色をいうが、狭義には外来の学術に対してその国固有の学術をさす。島田先生は『中国革命の先駆者たち』の二三八ページで、国粹(国学)と記されている。英語ではNational Learningに当たるか。
- (12) 『民報』では「設」と誤記されている。
- (13) 『民報』では「隠論」と記されている。
- (14) 『民報』では「愷悌」が「諒悌」と記されている。
- (15) 『民報』では蓋の字が益と誤記。
- (16) 『民報』では太の字の代わりに泰と記す。
- (17) 『民報』では「旦暮」の代わりに且莫と記している。
- (18) 七世紀半ば、三度にわたって唐朝よりインドに遣わされた使者。
- (19) ネパールの支配勢力。一七六八年に王朝成立。乾隆五七(一七九二)年に清朝の遠征軍に敗れ、清の宗主権の承認と五年一回の朝貢を約束させられた。一八一四—

六年のイギリス・ネパール戦争以後は対英協力姿勢もとるようになった。

- (20) 三国時代の蜀の武侯（諸葛亮）が南方に出兵し、その地方の有力者孟獲を七度生擒にし、七度釈放してやって、ついに心服させた故事。

- (21) 『民報』ではローマ字で Bhaskaracharya と併記している。一二世紀後半のデカン地方出身の天文学者、数学者バーカスカラ Bhaskara ないしバースカラ・チャール・ア・Bhaskaracharya をさしているようである。

- (22) 隋の闍那崛多等の訳。一〇巻。古代インドの宇宙論を知るうえで参考になるといわれる。大正大蔵経巻一に収める。

- (23) 天を鶏卵、地を卵黄にたとえる中国の渾天説の主張者たち。

- (24) 罕曼が誰をさすか今のところ明かでない。

- (25) 中国の南朝、宋の沮渠京声訳。二巻。修練中の疾病を癒やす十二法を示し、古代インドの医学思想を知るうえでも参考になるといわれる。大正大蔵経巻一五には『治痺病秘要法』名で収める。以下の引用は、上巻の治行者貪婬患法の一節。

- (26) 熟は全集版では孰とするが、『民報』および大正大蔵経版によった。生と熟はなまとうれるの対概念。生蔵と熟蔵が肉体のどの部分をさすか判然としないが、あるいはそれぞれ消化器官と排泄器官をさすか。

- (27) 大正大蔵経版によって、樹稽を樹根に直した。

- (28) 大正大蔵経版によって、二九を二支に直した。

- (29) 『民報』版、全集版ともに口中の口の字が欠けており、大正大蔵経版によって補った。

- (30) 「此の虫の形体」以下、「女虫は紅赤なり」までの文は、大正大蔵経版では割注の形となっている。

- (31) 中国、北魏の般若流支訳。七〇巻。大正大蔵経巻一七に収める。以下の引用は、正法念処経巻六五の身念処品之二の一節。

- (32) 注(24)参照。

- (33) 具体的に体験して悟ること。

- (34) ムガル帝国の抵抗勢力としてデカン地方に興ったマラーター王国の初代王シヴァージー（一六三〇—一八〇〇）。

- (35) 秦末漢初の斉の最後の王。漢の高祖に従うのを恥じて自殺。これを聞き知った五百余人の部下も皆自害した。

- (36) A. C. Bose, *Indian Revolutionaries Abroad, 1905-1927: Select documents*, New Delhi, 2002, pp. 74, 112, 285. これによると、彼は Muhammad Barkatullah (またの綴り Mohammed Barkatulla) で、東京外国語学校 (School of Foreign Languages, Tokyo) のヒンドゥー・スターニー語の教師の任に、少なくとも一九一一年六月の時点では就いていた。

- (37) M. K. ガンディー (田中敏雄訳) 『真の独立への道 (ヒンド・スワラジ)』岩波文庫、二〇〇一年。

